

保育現場による英語活動の取り組み

—保育園での実践を通して—

The English activities practiced in a childcare spot:
Through the practice at a nursery school

五十嵐 淳子・甘糟 節子

Junko IGARASHI・Setsuko AMAKASU

概要

本研究では、保育園での英語活動の実践を通して、子どもの意欲を高める英語活動はどのようなものが効果的なのかを分析した。その結果、保育者を目指す学生の英語力に不足がある場合でも、効果的な英語活動の実践方法を習得すれば、子どもに英語の楽しさを十分伝えることはできるということが明らかになった。英語活動であっても日常的に行われている行動にあっても、取り組み方は日々の保育の実践と同じである。目の前にいる子どもを理解し、子どもの発達に沿って効果的な教材を選択していく必要がある。特別に英語だからと身構える必要はなく、保育者の子どもに向かう姿勢が重要であることが改めて明らかになった。

キーワード：英語教師、保育者、コミュニケーション、英語教材

Summary

The aim of this study was to explore what kind of activities can effectively awaken children's motivation in English lessons. The results of the study suggest that even if the students, future kindergarten teachers or childcare workers, do not have a strong command of the English language, they could, if equipped with effective teaching methods, provide children with engaging learning experiences. Teachers may apply principles of daily interaction with children to their English education. There is a need to understand each child and provide teaching materials adapted to their needs. The study highlighted the fact that teachers need not be concerned about teaching English, and, rather, emphasized the importance of quality student-teacher interaction.

English Keywords: English teacher, childcare worker, communication, English teaching materials

目次

1. はじめに
 2. 研究方法
 - 2.1 実施期間及び対象
 - 2.2 活動計画
 - 2.3 活動計画の留意点
 - 2.4 教材
 3. 分析
 - 3.1 人気があった教材
 - 3.2 英語教材の効果
 - 3.3 英語活動の効果
 4. 考察
 5. おわりに
- 引用文献
参考文献

1. はじめに

幼稚園や保育園で英語活動を取り入れる園が多くなっている。実際に英語活動を導入している幼稚園の割合を調査した結果、首都圏の私立幼稚園では、約10%の幼稚園が英語活動に取り組んでいることが明らかになった¹。

英語教育は、2011年度からは小学校5・6年生で週1回、年間35時間の外国語活動が必修化されている。小学校学習指導要領においては、外国語活動の目標として「外国語を通じて、言語や文化について、体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ということ掲げている²。私立小学校や公立においても英語重点校に指定されている小学校では、小学校1年生から英語活動を導入しているところもある。

また、2020年度をめどに小学校5・6年生から英語が正式科目となることが発表されている。現行の小学校の英語教育は、授業は週1回で、学級担任が主に指導を行い、歌やゲーム等を通じて英語に親しむ活動が行われており、読み書きについてはほとんど指導していない。正式科目となれば、授業は週3回となり、中学校の学習内容を一部前倒するとともに、読み書きの内容も組み込まれ、英語専門の教員が指導にあたるようになる。

そのため、小中連携に加えて保幼小連携の動きも活発化している。母国語の重要性や幼

児期からの英語教育の賛否は論じられていても、実際に小学校で外国語活動が必修化され、英語活動が導入されたことで、幼稚園や保育園でも英語活動を取り入れる園が増加している。

実際の保育現場で行われている英語活動は、外部講師としてネイティブ教員が担当している場合もある。主に年長組を中心に、週1回程度の英語活動を行っているところが多く見受けられる。活動内容としては、挨拶から始まり歌やゲーム、絵本の読み聞かせ等の内容で英語活動を展開しているところが多いと言える。

そこで、本研究では、保育園での英語活動の実践を通して、子どもの意欲を高める英語活動はどのようなものが効果的なのかを分析する。

2. 研究方法

2.1 実施期間及び対象

平成25年4月8日～平成25年7月8日までの3ヶ月にわたり、東京都内の私立保育園年長組（1クラス男児7名、女児9名 計16名）において週1回30分の英語活動を実施した。

2.2 活動計画

英語教材の選択にあたっては、子どもが積極的にコミュニケーションを図ろうとする点に考慮した。また、実際の展開にあたっては、説明や指示については日本語を使用し、場合によっては簡単な英語での指示語を目の前の子どもの状況に応じ増やしていく方向で英語活動の実践を行った。保育園での英語活動の実践は筆者（甘糟）が行い、内容は以下の手順とした。

【表1 英語活動の計画】

1回目	挨拶の練習、「立つ」と「座る」という動作に対するの指示語の理解、出席を取る時の答え方、自分の名前“I m ~.”、数の導入、歌 Super Simple Songs2 の “Count and Move”、“Seven Steps” , “Done” の導入、終わりの挨拶の練習
2回目	挨拶の練習、「ごきげんいかがですか」の質問に対するの答え方、数の数え方、自分の名前 “I m ~.” の練習、歌 Super Simple Songs2 “Counting Bananas”
3回目	挨拶の練習、自分の歳 “I m six (five).” の練習、“My Number Book” 作り、終わりの挨拶
4回目	挨拶の練習、“long time no see.” の練習、“Thank you, Mother.” の練習、“dandelion” の説明、“How Many? (CTP) Number Theater One Little Brown Seed (SmartInk Books) , 終わりの挨拶
5回目	挨拶、“May” の練習、“How Many?” , “I m hungry.” 導入、絵本「はらぺこあおむし」、終わりの挨拶
6回目	挨拶、“I m Japanese.” の練習、“absent” 練習、“feeling” のフラッシュカード “hungry” , “happy” , “angry” , “scared” を使って “I m ~.” の練習、終わりの挨拶

7回目	挨拶、“June”月の英語の練習、野菜の英語“tomato”、“cucumber”、“eggplant”、“green pepper”の練習、“feelings”のフラッシュカード、“I’m～.”の練習、終わりの挨拶
8回目	挨拶、“June”の練習、“feelings”のフラッシュカード、iPadでアルファベットの復習、終わりの挨拶
9回目	挨拶、“June”確認、“Monday”曜日の英語の練習、“red”、“white”の色の英語の練習、野菜の単語復習+“I like～.”の導入、“Little Green Frog”読み聞かせ、終わりの挨拶
10回目	挨拶、“June”、“Monday”の復習、天気導入、“Little Green Frog”、ゲーム“toss, bounce and score”、終わりの挨拶
11回目	挨拶、“Monday”の復習、“July”の練習、“birthday”の練習、カエルの鳴き声の練習、“toss, bounce and score”、“scissors”の練習、終わりの挨拶
12回目	挨拶、“I’m sorry.”の練習、お天気、ジャンケン“Rock, Scissors, Paper”の練習及びジャンケンゲーム、“People Say Hello”(CTP)の読み聞かせ、終わりの挨拶

2.3 活動計画の留意点

英語活動を組み立てるにあたっての留意点として、一番大切にすることは、楽しく英語に触れる場を展開しようとしたことである。題材は身近なものとし、自己表現ができるように心掛けた。体を動かすアクティビティを取り入れるようにしたが、その際には興奮状態に陥りやすいことを考慮し、子ども同士の競争心を刺激するゲームも実践するようにした。

文部科学省では、小学校英語活動の実践に関して「多くの子供が、初めて母国語以外の言語に触れるという実態から、負担感を持たせたり、興味・関心を失うような活動内容になったりすることは、英語嫌いを作ることにもなりかねない。」と言及している³。この点を考慮し、英語嫌いにならないようにすることに視点を置き、以下の点に考慮した。

【表4 英語活動において考慮した点】

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 常に笑顔で接する。 ② 英語教師自身が楽しいと感じる活動にする。 ③ 子どもの名前を呼び、“name card”を首に掛ける時、まず全員とアイコンタクトを取り、笑顔を交わし合い、握手する。 ④ すべての発話に対し、“Good!” “Wonderful!” “Great!”等の褒める言葉を返す。 ⑤ 子どもに英語をリピートさせる時は、必ず最低3回繰り返す。 ⑥ 保育者も英語活動に参加してもらう。 ⑦ フラッシュカード、指人形、ぬいぐるみ、本物の葉、本物の聴診器、白衣等を準備し、子どもが興味を持ちそうなものを探し出す。 ⑧ 英語活動が終わった時に、「楽しかった!」という思いが感じられるようにする。 |
|---|

2.4 教材

英語活動で使用する英語教材として、絵本、ワークシート、フラッシュカード、歌などを取り入れ、以下のものを準備した。

(1) 絵本

- ① Christopher Franceschelli, *Number Theater One Little Brown Seed*, SmartInk Books LLC, 2010 (10 頁, 25.5cm×28.5cm)
- ② Rozanne Lanczak Williams, *How Many*, Creative Teaching Press, 1994 (8 頁, 23cm × 16cm)
- ③ Eric Carle, *The Very Hungry Caterpillar POP-UP BOOK*, Pholomel Books, 2009 (14 頁, 29.5cm × 21.8cm)
- ④ Karl Edwards, *Little Green Frog*, Creative Teaching Press, 1994 (8 頁, 23cm × 16cm)
- ⑤ Will Barber, *People Say Hello*, Creative Teaching Press, 1996 (8 頁, 23cm × 16cm)

(2) フラッシュカード

- ① アルファベットのフラッシュカード
- ② アルファベットのフラッシュカード (iPad の活用)
- ③ 色のフラッシュカード
- ④ 数字のフラッシュカード
- ⑤ 1 月から 12 月までのフラッシュカード
- ⑥ 曜日のフラッシュカード
- ⑦ 国旗のフラッシュカード
- ⑧ 野菜のフラッシュカード
- ⑨ “feeling” のフラッシュカード

(3) 歌 (音源は CD を使用)

① Count And Move

数の歌であり、英語で聞きながら動き回れる曲である。

② Hello Song

英語と日本語を含む 10 カ国での挨拶の歌である。国旗のフラッシュカードと共に、子どもが興味を持ち易い題材である。

③ Head Shoulders Knees & Toes

日本語のタイトルは「あたま・かた・ひざぽん」であり、子ども達は日本語でよく知っている歌である。

(4) その他の教材

- ① Mickey Mouse 手人形
- ② むいぐるみ (タコ、てんとう虫、猫、ナメクジ、蛇、カエル)
- ③ 聴診器

3. 分析

3.1 人気があった英語教材

英語活動の実践を通して、子どもの意欲を引き出すためにも、英語教材は非常に重要となることを改めて感じた。人気があったと判断した理由としては、何度でもその教材を使いたがる。子ども達の方からその教材を使用した英語活動をしたいという意思を伝えてくる。好きな教材を使うレッスンでは、子どもたちの顔が生き生きとし、集中力も高まるのを感じ取れるという視点から選択した。英語活動において子ども達に人気があった教材は以下のとおりである。

【表2 人気があった教材】

教材名	使用場面
(1) 蛇のおもちゃ	数の導入、“feeling”のフラッシュカードにおける“scared”の表現
(2) カエルのむいぐるみ	“I like~.”のセンテンス 絵本“The Little Green Frog”
(3) “feelings”のフラッシュカード	気持ちを表現する
(4) 絵本“The Very Hungry Caterpillar POP-UP BOOK”	“feelings”のフラッシュカードにおける“hungry”の表現
(5) 歌“Hello Song”	英語以外の言語での挨拶

(1) 蛇のおもちゃ

英語活動が終了しても、子ども達は蛇の周りに集まり、触りたがったり、首に巻きたがったりした。子ども達は最初は「キヤー！」と言いつつも、「怖いもの見たさ」で興味を持ち、次の段階で全員が触りたがり、触ってから「自分は触れるぞ！」ということを感じながら、各自満足そうにしているのがこちらにも伝わってくる。最後には、全員が一列に並び蛇を首に巻いてもらい、更に満足して笑顔で、“Thank you.”と言って、やっと蛇から離れていった。子ども達は、この蛇が大好きで、蛇の出番が無くなっても、子ども達から、「先生、今日も蛇持ってきた」と尋ねられることが多かった。

蛇を持参しない英語活動では、数名の子どもから、「先生、今日は蛇は持ってこなかった

の？」ととても残念がっている様子が見られた。子ども達の方から、言及するほど蛇に魅力を感じているのが伝わってきた。



<写真1 蛇のおもちゃ>

(2) カエルのぬいぐるみ

ぬいぐるみは子ども達にとって、身近な存在であり、親しみ易い教材の一つである。カエルの口が開く仕様になっているため、最初一人が口に手を入れたところ、全員がやりたいということで、一列になり、一人ひとり順番に、カエルに手を食べられて、“Yum, yum, I like (子どもの名前).” という活動を行った。英語活動が終了しても、カエルの周りに子ども達の輪ができる。ぬいぐるみは指人形のように動かせるものであるほど効果的であった。

(3) “feelings” のフラッシュカード

“feelings” のフラッシュカードを使用したアクティビティが、子ども達から大変人気があり、子ども達みんなが主体的に取り組んだことが印象的であった。横一列に並んで、順番に一人だけ前が出る。教師は持っている“feelings” のフラッシュカードをシャッフルし、裏返しにしておく。子どもはカードを一枚引き、フラッシュカードに描かれている“feelings” をみんなの前で言葉とともに体で表現する。

1回目も楽しそうに活動していたが、「もう一度やりたい」という要望に応えると、2回目は、更にパワーアップして、声も動作も大きくなり、満足感で溢れている表情を見せていた。「先生、また happy とかやりたい！」と子どもの方から要求が出たので驚いた。様々な英語活動をしているが、ゲームの他に子ども達の方から、もう一度やりたいと言われる経験はあまりない。この活動は教師の予想を上回るほど楽しい雰囲気、子どものやってみたいという気持ちを引き出せたアクティビティとなった。



<写真2 “feelings” のフラッシュカード>

(4) 絵本 “The Very Hungry Caterpillar POP-UP BOOK”

子ども達がよく知っている絵本だが、その絵本が数段魅力的な、刺激的な装丁で目の前に広げられ、物語を展開していく。ページを繰るごとに子どもたちが、目を見開いて、次はどんな仕掛け何だろうと期待しているのが伝わってきた。最後のあおむしが蝶になった場面では、「きれい！きれい！」「もっと見せて！」と興味を掻き立てられている様子が伝わってきた。

「はらぺこあおむし」の絵本の英語版であり、子ども達に見て欲しいと思ったため、“feelings” のフラッシュカードで “hungry” の単語を表現した時に使用した。保育者に日本語で絵本の読み聞かせを行ってもらい、保育者の隣で POP-UP BOOK を見せるようにした。子ども達は絵本に惹きつけられている様子だった。

(5) 歌 “Hello Song”

この歌は、全部が「こんにちは」で構成されており、日本語の「こんにちは」が入っているので、数回聞くとすぐに歌えるようになり、大きな声を張り上げて歌い上げる様子から、子ども達にとって、歌いやすく馴染みやすい歌であることが伝わってくる。この歌を導入する際には、各国の国旗のフラッシュカードも使用する。色鮮やかな各国の国旗は、見ているだけでも楽しむ様子が伝わってきた。

「10人のインディアン」のメロディに乗って歌う、英語を含む10カ国の挨拶だけの歌である。一度習うと、すぐに歌いたくなる乗りの良い楽しい歌である。他の言語の挨拶は、子ども達にとって、新鮮で刺激的なようだ。今まで指導してきたどのクラスの子も達も、みんなが大好きな歌である。

特に、最後の2つの言葉「ナマステ、こんにちは～」と歌う際に「ナマステ」で手を

前で合わせ、「こんにちは」でお辞儀をすることで、さらに歌の魅力が増すのである。「ナマステ、こんにちは」で締めくくるとは、最後は、「ナマステ」で両手を胸の前で合わせる動作がある。「こんにちは」でお辞儀をする動作が楽しいようで、子ども達の表情が生き生きしていることがわかった。

今までで 60 人以上の子どもにこの曲を紹介してきたが、全員が積極的に歌い、楽しんでいるのがこちらに伝わってくる。自宅で子どもに英語を教えていた時には、保護者から CD を購入したいと問い合わせがあったほど人気の歌である。

3.2 英語教材の効果

(1) フラッシュカード

① アルファベットのフラッシュカード (iPad の活用)

紙ベースのフラッシュカードより、子どもたちが喜ぶのではないかとこの予想の基に使用してみたが、紙ベースと何ら違った反応は得られなかった。現代社会では子どもの周囲に情報機器が溢れている。子どもを取り巻く環境として、常に身近に電子機器があるため、iPad にも慣れ親しんでいる様子であった。

② 国旗のフラッシュカード

国旗を使って、国の名前、またその国で使われる言語の紹介に使用した。子ども達はカラフルな国旗に大変興味を抱き、好奇心溢れる顔で、取り組む姿が印象的であった。また、様々な国の言語での挨拶を覚えるのは、刺激的であるようだ。

③ 野菜のフラッシュカード

子どもたちが自ら植えた野菜の苗の成長を楽しみにしていたので、知らない野菜の単語を紹介するより、子どもが知っている野菜を選び、興味や関心を持つことに繋げた。

また、給食でそれらの野菜が出たら、年少の子どもにも教えてあげるように促した。保育者に尋ねたところ、数名が実際に年少児に野菜の英語を教えていたとのことであった。保育園の中で覚えた英語を教え合う姿が見られたが、家庭においても保育園で覚えた英語を話しているのではないかと推測する。このように子ども同士のかかわりや家族とのコミュニケーションが英語活動を通して広がっていくことが期待できる。

(2) 歌

① “Count And Move”

数を英語で聞きながら動き回る。数を英語で言える子どもには歌に合わせて口ずさむように促すが、曲が流れて体が動き出すと、英語で数を言っている子どもはいなかった。

② “Head Shoulders Knees & Toes”

体の単語に興味を持つように導入として、子ども達の体の各部位に聴診器を当てていく

活動を行った。テンポの良い曲で、子ども達は体を動かしながら、楽しそうに参加していた。特に気を付けたことは、単語に合わせての動きでなく、頭からつま先まで、目から鼻までを何となくタッチする傾向になり易いということである。そのため、歌の前に子ども達には言葉に合わせて、各体の部位をタッチするように促すように心がけた。

(3) むいぐるみ (タコ、てんとう虫、猫、ナメクジ、蛇、カエル)

最初に、“How Many”の本を読む前に、本に登場する動物の英単語と、その動物の足の数を英語で発音するために使用した。ここで大切にしていることは、むいぐるみを子ども達に、最初から見せてしまわないことである。一体何が出てくるのかと、子ども達に期待感を持たせるように心がけた。

中身の見えない袋に入ったままのむいぐるみのほんの一部を見せながら、“What’s this?”「これは何かな?」「タコ」という答えが返ってきたら、“Yes, it’s an octopus.” “How many legs on an octopus?”「タコには足が何本あるかな?」とタコ、てんとう虫、猫、ナメクジまで繰り返した。蛇は、“feeling”のフラッシュカードを使用した英語活動の際に、“scared”の気持ちを表す時に大変役に立った。

(4) 聴診器

“Head Shoulders Knees & Toes”の歌の導入時に使用した。体の各部位を指差しながら教えるより、子どもたちが更に興味を持てるように使用した。子ども達全員の体の各部位を順番に、聴診器を当てると、全員が自分の順番を心待ちにしているのが、こちらに伝わってくる。興味を持たせることや面白そうと思わせることは、子どもの集中力に繋がることを実感した。

英語活動終了後も聴診器が気になる様子であったので、一列に並ばせ、子ども達に自分の心音を聞かせる。自分の番が来るのが待ち遠しい様子で、心音が聞こえると口では言わないものの、「あっ!」何かに気づいた表情になる。その時には必ず目を合わせ、共感していることを表すように心がけた。子ども達の中には、心音を聴き終わった時に、“Thank you!”と、こちらが促さなくとも、英語で礼を言う場面もあった。

3.3 英語活動の効果

筆者(五十嵐)が英語活動の実践を観察し、挨拶、歌、発音、絵本、フラッシュカード、ゲーム活動などの英語活動を通して子ども達にどのような変容や反応が見られたのかを分析する。枠の中は英語活動の実践記録であり、その後に実践の考察を以下にまとめた。

(1) 挨拶

挨拶の練習はミッキーマウスの指人形を使いながら、英語教師がミッキーマウスの声色で、“Hi, I’m Mickey Mouse.”とやってみる。子ども達は全員が大喜びしており、わくわくしている様子が伝わってきた。教師が子ども一人ひとりの名前を呼び、順番に、“Hi, ○○○! I’m Mickey!”と挨拶を行った。次に、教師がミッキーマウスの声色で“Hi, I’m Mickey.”と子ども達に向かって挨拶をしながら、保育者の所へ行って、“Hi, I’m Mickey.”と言うと、保育者は“Hi, Mickey. I’m ○○.”というデモンストレーションをゆっくりと行った。

英語教師が「今度はみんなの番だよ」「Your turn」と声掛けを行うと、「えー」と驚いて恥ずかしがる姿が見られた。そこで、「じゃあ、できる人はいるかな?」と尋ねると5人の子どもが元気よく「はい!」と答えた。次に、英語教師が「じゃあ、一列に並んでね」、「Make a line.」と言って子ども達を一列に並ばせ、一人ずつ“Hi, Mickey. I’m ○○○.”と挨拶の練習を行った。ミッキーマウスの指人形は子ども達に大変人気があり、ミッキーマウスに向かって嬉しそうに挨拶していた。さらに積極的に握手をする子どももいた。英語教師が、「今度ディズニーランドに行ってミッキーに会ったら、みんな英語でご挨拶できるね。」と言うと、子ども達は楽しそうに挨拶を繰り返していた。

初めての英語活動の際に、挨拶の練習としてミッキーマウスの指人形を使用していた。英語教師と挨拶の練習をするよりも、子どもが大好きな“Mickey Mouse”と握手をしながらの練習の方が、子ども自らがやってみたいという気持ちになる。教師は“Mickey Mouse”の声色で盛り上げるように工夫していた。子ども達は、恥ずかしそうにしながらも“Mickey Mouse”と嬉しそうに握手をしながら、“Hi, Mickey! I’m ~.”と挨拶と自分の名前を言っていた。

ミッキーマウスなどのキャラクターを使用することは、英語活動だけでなく、保育においても子どもの興味や関心を引き付けることができるため、有効的な教材の一つである。その場合、英語教師は演じることが必要になり、役になりきることが大切となってくる。指導者自身が恥ずかしがったり、躊躇したりすると導入がスムーズに進まずその後の展開に影響が生じてしまう。

ミッキーマウスの指人形を通して、子ども達の興味を促し、挨拶する練習が円滑に行われていることがわかる。また、挨拶の練習を一人ずつ行うことに関しては、最初は恥ずかしがる子どももいたが、1人ずつ行うことで、英語で挨拶ができた満足している様子であった。全員が挨拶を練習するという体験ができたことが、子ども達が自発的に挨拶を繰り返すという行動に繋がっていることがわかる。

(2) 歌 “Count and Move”

導入として、最初は英語教師が1から20のカードを見せながら、子ども達と一緒に日本語で数える。次に1から20のカードを見せながら、「英語で言える人はいますか」と質問すると、予想通りほとんどの子どもが“one, two, three.”と答えていく。11から20になると言える子どもが少なくなってきたが、20まで言える子どもが1人おり、スムーズに20まで進められた。

次に、保育者が風船を取り出し、英語教師と保育者が交互に風船でキャッボールを行い、風船を20回ポンポンと叩きながら、英語で数を数える練習を行った。

その後に、“Count and Move”の曲に合わせて、体を動かす。一回目は子ども達もまだ曲に体がついていけないので、繰り返して練習した。反復する度に、子ども達の体が徐々に動いてきた。スムーズに曲に合わせて動けるようになってきたので、今度は“Seven Steps”を取り入れて踊る。子どもを男女別に分けさせ、子ども同士お互いが見れる位置で踊るように指示する。

英語教師は「どちらが上手に踊れるかな」と言いながら子ども達だけで踊るよう促した。歌に合わせて踊ることはとても楽しそうである。輪になって、数を英語で言いながら、曲に合わせて体を動かすことで、子ども達に笑顔が見られた。

数を数える歌である“Count and Move”を歌うことで、自然と数を英語で言えるようになる。数は子ども達にとって身近であり、1, 2, 3の英語は知っている子どもも多い。英語教師が教えなくても10までは子どもだけで発音できていた。そのため、英語教師が導いていくより、英語で数が言える子どもが他の子どもに教える方が効果的であると感じられた。

また、何もない状態で数を数えるより、風船などを利用して英語で数を数えることは、英語で数字を覚える楽しさに繋がる。今回の実践では、英語教師と保育者のみの風船でのやり取りであったが、子ども達全員が風船に触れながら参加することで、活動が広がり子どもが主体的に数を数えることができるようになるのではないかと感じた。

(3) 歌 “Counting Bananas”

最初に子ども達を座らせ、今から曲を聴くことを伝えた。英語教師が「聞き取れた言葉を後で教えてね。」と言うと、子ども達は聞き取ろうとしながら、静かに集中して曲を聴いていた。英語教師が「聞き取れた言葉は何でしたか」と質問すると、数字が聞き取れていた。“Banana”に関しては日本語ではバナナの言葉を知っているので、聞き取れている子どもがいるのではないかと予想したが、結局“Banana”を聞き取れている

子どもはいなかった。

子ども達が輪になり、英語教師と保育者が輪の内側に入り、歌に合わせて一人ひとりにバナナを配った。英語教師が「one, two, three, の数のところはお歌に合わせて歌ってみてね。」と声掛けしたが、子どもの興味はバナナに集中し、数を口ずさむことを忘れていた。そこで、子ども達の手を持っているバナナを英語教師が歌に合わせてながら、順番にバナナを子どもの頭に乗せていった。最後に子ども達全員で1から20まで英語で数えながら、バナナを籠に回収した。

音楽やリズムに合わせて体を動かしながら英語を覚える方法は、様々な英語指導で取り入れられている。中山は「幼児英語の指導においては、英語の歌を楽しく歌うことが、最適な方法のひとつと考えられる。」と述べている⁴。英語活動では五感を使うことが非常に大切であるが、歌を歌いながら体を動かすということは、音楽を耳で聞き、口で歌い、他の子どもの動きを目で見て、手や足も使いながらリズムを取り、体全体を使うこととなる。体に刷り込むことによって、自然に単語やセンテンスが定着しやすい。繰り返す度に、子ども達の表情が生き生きしており、音楽を通して体全体を動かすことで楽しい気持ちとなり、英語が楽しいと思っていることが推察できる。

(4) 発音

英語教師が「昨日は何の日だったかな」と質問すると、子ども達は「母の日」と答えた。そして、母親のお手伝いをしたことを話す子どももいた。英語教師が子どもの話に耳を傾け、一通り子ども達の話が終わった後で、「お母さんは英語ではなんていうのかな」と質問すると、子ども達はわからない様子で、日本語で「母」と答える子どももいた。

英語教師が「母は日本語だよ」と言いながら英語で“mother”という単語を発音した。“mother”のリピーティングを行い、次に“Thank you, mother”というセンテンスの練習を行った。英語教師をお母さんに見立てて、握手しながら、子ども一人ひとりと“Thank you, mother.”の練習を行った。子どもは教師の発音を真似ながら“th”の発音をすらすらとやってのける。大人のように躊躇することなく、初めての音も出そうとする。

英語教師が「今日の夕方、ご飯を作っているお母さんの後ろから、トントン突ついて、“Thank you, mother.”って言ってごらん。おかあさん、びっくりしちゃうよ。」と言うと、1人の子どもから「おかあさん、包丁で手を切っちゃうよ」という発言があった。英語教師が「お母さんがびっくりしちゃうね。」と言いながら、「さっき、先生がお

母さんに何て言ってみてって言ったのを覚えてるかな」「何て言うんだっけ」と質問すると、ほとんどの子どもの手が挙がった。そして、「みんなお母さんに何て言うのか英語で言ってみよう」と言うと、子ども達は一斉に“Thank you, mother.”と発音することが出来ていた。

次の週に、英語教師が「お母さんに“Thank you mother.”は言えたかな」と尋ねると、1人の子どもが、「お母さん、手を切っちゃったよ。」もう1人の子どもは、「おかあさん、お洗濯物干しているときだったから、手を切らなかった。」と発言する。教師が「みんなのお母さんは、びっくりしてなかった」と質問すると他の子ども達も「びっくりしてた!」と答えており、先週教えた“Thank you mother”という言葉覚えて、実際に使うことができたことが確認できた。

外国語学習に関しては、音声面の習得に関しては敏感期が存在すると言われており、敏感期を過ぎると、第二言語の習得が困難になるという説がある⁵。そのため、子どもは大人より発音を覚えるのが上手である。特に“th”や“L”と“R”の発音は、日本人にとって発音が困難であるが、子どもは自然に発音することができる。発音に関しては、ネイティブ教員が適しているが、英語活動を取り入れている園の全てにネイティブ講師が派遣されているとは限らない。日本人が行う場合は、CD等の音源を利用することやフォニックス等の教材を取り入れることも必要である。

(5) 絵本「はらぺこあおむし」

英語教師が「お腹のすいた青虫のお話知っている人はいるかな」と質問すると、子ども達は声を揃えて「はらぺこあおむし」と答えた。子ども達全員が知っている絵本である「はらぺこあおむし」の絵本の読み聞かせを保育者により日本語で行い、保育者の隣で、教師は英語のpop-up bookを子ども達に見せていた。子ども達は絵本に集中しており、次は何が出てくるんだろうと期待感とともに絵本を見ていることが伝わってくる。最後の蝶々が現れた時、「きれい!」と子ども達から歓声が上がった。

次に英語教師が「さっき読んだ「はらぺこあおむし」の「あおむし」って英語でなんと言うかわかるかな」と質問すると1人の子どもがすぐに“caterpillar”と答える。そこで、“caterpillar”の発音練習をしながら、青虫のぬいぐるみを見せると子ども達は喜んでぬいぐるみ触っていた。

英語で絵本の読み聞かせを行う場合は、保育現場で日頃から読んでいる絵本を選択することで、知らない英語がでてきても、内容を把握することができる。英語活動では絵本を英語で読むことが理想であるかもしれないが、子ども達の様子を見ていると、日本語の絵

本と英語の pop-up book の両方を使用したことは、大変効果的な読み方であったと考える。保育者が絵本の読み聞かせに連動して英語の pop-up book ページを繰るたびに、目を見開いて、本に見入る子ども達の姿が見受けられ、絵本の世界に引き込まれていた。

(6) フラッシュカード

教師が“feelings”のフラッシュカードを出しながら、“happy, angry, scared, sleepy”の4つの単語を復習した。先週休んだ子どもに対して他の子ども達が単語の意味を教えてあげることで、子ども同士のかかわりが広がっている。感情を表す4つの単語から一つ選び、“I’m ○○”のセンテンスの練習を行った。“scared”の単語を使う時は、教師が蛇の玩具を出して、“scared”という感情を子ども達から引き出すようにしている。子ども達は全員が蛇のおもちゃが大好きな様子であった。

次に、子ども達が一列に並び、一人ひとり前に出て、“feelings”のフラッシュカードを引いて、カードに書いてある感情の単語を使いながら、“I’m ○○”と表現する活動を行った。全員が一巡して終わると、子ども達から「もう一回」という声があがった。子ども達全員から「もう一回」という要望があったので、再度行うことになった。1回目より、子ども達が自信を持って“I’m ○○”大きな声で楽しんで発音できていた。“scared”の単語が出てきた時に蛇の玩具をだすと子ども達は大はしゃぎしていた。

英語活動が終了し、教師が蛇の玩具を片付けていると子ども達が集まってきて、蛇を触って大騒ぎしている。子ども達の中には“I’m scared”を言う子どももいた。

フラッシュカードは単語を覚えていく上で大変有効な手段の一つである。視覚を通してキャッチした情報があるため、耳だけで単語を覚えるより、記憶に残りやすい。保育所保育指針では、保育内容の領域「表現」について「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と提言されている⁶。今回はフラッシュカードを使って、単語を言うだけでなく、体で表現することも取り入れられており、自分の気持ちを英語で表現するという活動となっていた。子ども達は非常に興奮した様子で、表現する楽しさを体感している姿が見られた。

英語活動終了後も、蛇のおもちゃを触りながら、“I’m scared”と言って興奮している様子から、言葉の意味を理解し、他の場面においても応用することが自然にできていることがわかった。

(7) ゲーム「じゃんけんゲーム」

最初に、子ども達は座ったまま手を挙げて、グー、チョキ、パーを作りながら、“rock, scissors, paper”を3回ずつ行う。その後に子ども達を2チームに分けて、向かい合わせに並び、各チーム一人ずつでてきて、じゃんけんで対決する。

T: “Are you ready?”

C: “Yeah!”

T: “One, two!”

C: “Rock! Scissors! Paper! Go”

あいこの時は、“Try again.”と英語教師が言いながら、対決が続いていく。勝っても負けても、それぞれのチームから歓声が上がった。勝った子どもには、英語教師が“You win.”と言ってメダルを渡した。負けた子どもに対しては“You lose.”と言いながら、頭をなでる。最後は保育者と英語教師の対決となる。子ども達は興奮した様子で楽しそうであった。

ゲーム終了後に、各チームで何個メダルが取れたか、英語で数を数えた。勝ったチームの子ども達は喜んで飛び跳ねる子どももいた。そして、負けたチームからすぐに「もう一回」という声が上がったため、再度同じゲームを行った。

ゲーム活動としては、日常の保育で行われているゲーム活動を英語にアレンジして行うと、子どもの理解が得られやすく、ゲームも盛り上がりやすいと言える。じゃんけんゲームはほとんどの園で取り入れられており、個人戦がチーム戦に繋がり、全体の勝敗となるので、子ども達にとって、非常に人気のあるゲーム活動である。

子ども達は、1回目のゲームの終了後、すぐに2回目のゲームをやりたいと教師に要望しており、楽しい活動であったことがわかる。また、2回目終了した後も、再度やりたいと言っており、主体的にゲームに参加していることがわかる。

ゲームを英語で楽しむために心がけておかなければならないことの中に、子ども達ももっとやりたいと思っているところでゲームを切り上げることがあげられる⁷。その場合は、再度やりたいと希望している子ども達に対しては、「今度またやろうね」等の声掛けを行い、子ども達のやりたいという気持ちを大切することが必要となる。

4. 考察

乳幼児期の言葉の発達には、外国語の習得だけでなく母国語を含めて目覚ましい。保育所保育指針解説書では、「言葉をめぐっては、話すことと聞いて理解することが大切ですが、特に乳幼児期には言葉への感覚を豊かにし、言葉を交わすことの楽しさが十分に味わ

えるようにしていくことが重要です。」と示されている⁸。したがって、言語獲得では、言葉を使いながら楽しいと思える体験をすることが効果的である。

保育現場での英語活動では、英語教育だけでなく常に保育の視点を持つことを忘れてはならない。保育内容では、領域「人間関係」の内容の14項目に「外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ」ということが掲げられている⁹。異文化理解を行う上で、母国語とは異なる言葉に触れ、外国語を通して異文化理解へと繋げていくことは、人間形成の基礎を培う乳幼児期に必要な体験であると言える。

文部科学省では、「児童期は、新たな事象に関する興味・関心が強く、言語をはじめとして、異文化に関しても自然に受け入れられる時期にある。このような時期に英語に触れることは、コミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験になる。『英語活動』そのものが異文化に触れる体験となり、さらに、外国の人とは文化に関わろうとするときの手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにもつながる。すなわち、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成を狙うことが重要である。」と言及している¹⁰。

今回の英語活動の実践では、子どもに英語を流暢に話させようということではなく、英語活動は子ども達が「楽しかった、英語の世界は自分たちの国と違うみたいだ、英語以外にも、違う言語の世界がある、そこはどのようなところなんだろう」と好奇心を持つことを大切にしながら、異文化理解に視点を置いた英語活動を展開していたと言える。

今回の英語活動の実践を通して、子どもの変容が見られたことがあった。子ども達が笑顔で英語活動に参加している中、一人だけ笑顔のない子どもがいた。英語活動では、全然笑顔を見せることのない子どもであり英語に興味があるのさえわからない様子であった。

しかし、夏休みが終了した後の英語活動では、笑顔でレッスンに参加していることに気づき、その変容に驚き保育者に英語活動の様子を報告した。保護者の話から、最初の英語活動から、英語活動を非常に楽しみにしており、英語活動のあった日は必ず、英語活動で覚えたことを母親に伝えていたということがわかった。

また、その子どもには中学生の兄がいて、彼女が英語活動で覚えた英語を家で披露して、兄を驚かせたというエピソードを、保護者が話してくれたという内容を聞くことができた。保育者は、その子どもはいつも黙っているけれど、何でもよく聞いていることを話してくれた。

保育者からは、子ども達は毎週の英語活動を心待ちにしているということを聞いていたが、英語活動の時間だけでは、普段の子どもの様子はわからない。したがって、保育者と話をする時間が非常に大切であることを改めて感じた。保育者と英語教師がコミュニケーションを積極的に図ることによって、さらに一步踏み込んだ英語活動が展開できる。

今回の英語活動の実践を通して、英語教師として外部講師が英語活動を担当する場合

は、英語活動のみを行うだけでなく、保育者と保護者との連携がいかに大切であるかということを改めて認識することができた。保護者が英語活動をどのように思っているかは子どもの英語の繋がりに大きな影響を与える¹¹。しかし、実際の保育現場では、英語教師から保護者に話をする機会がなく、保育園と家庭の連携を通じて、英語活動における適切な助言ができないことは今後の課題としてあげられる。そのため、今後は外部講師と保護者とのコミュニケーションを図っていくためにも、子どもだけでなく保護者も一緒に英語活動に参加する機会を設けることが必要である。

5. おわりに

子ども一人ひとりが英語活動を楽しみ、コミュニケーションを図る楽しさを感じ、満足できる活動にしていく必要がある。秀は「英語活動内容の詳細においては、やはり子ども達の日常に即したものとなっており、日常保育においても、子ども達自身が自らの経験と英語を結び付けやすくすることが可能と考える。」と提言している¹²。そのためには、子どもの実情を理解しておく必要があり、保育者以外の外部講師が英語活動を担当している場合には、クラスの状態や子ども一人ひとりの発達に対して相互理解しておくことが重要である。

今回の保育園における英語活動の実践では、指示語は簡単な英語を使用しているが、説明等は必ず日本語で行っており、理解できない子どもがいないように配慮されている。そのため、保育者を目指す学生の英語力に不足がある場合でも、効果的な英語活動の実践方法を習得すれば、子どもに英語の楽しさを十分伝えることはできるということが明らかになった。

また、英語活動では英語教材の使用が重要であるが、根底にあることは保育の実践と同じであり、目の前にいる子どもを理解し、子どもの発達に応じたものを選択していく必要がある。このことに関しては、英語のプロである英語教師より保育のプロである保育者の方が勝っているのではないかと考える。そのため、外部講師が英語活動を担当する場合であっても、保育者と協力して実践を行うことが重要であることが改めて明らかになった。

さらに、保育者の役割に対しては、今回の実践でサポートする保育者が違うと英語活動にも相違が生じることが明らかとなった。今回の英語活動では2人の保育者がサポート役として英語活動に参加したが、1人の保育者は、英語活動を子ども達と一緒にあって、非常に楽しんでいる。子どもに対しての指導は英語教師に任せ、保育者から子どもに対して注意をすることはなかった。また、もう一人の保育者は英語活動を楽しもうという様子はほとんどなく、英語教師の脇に立ちながら子どもを注意することが多かった。

小川は「どんなに優秀なALTがいても、担任の取り組む姿勢が子どもたちの英語活動

への意欲に大きく影響します。」と言及している¹³。英語活動の内容は同じことを行っても、子どもの表情や集中力に違いを感じ、英語を楽しもうとする雰囲気や子ども達の達成感も明らかに全く違うものとなった。前者の保育者と組んだ英語活動は、非常に楽しい雰囲気となり、子ども一人ひとりがやってみいたいという気持ちを持つことが出来ていた。

しかし、後者の保育者と組んだ場合は、楽しさや充実感が半減するという結果となった。したがって、外部講師が英語活動を担当する場合は、英語教師をサポートするだけでなく、保育者が自ら子どもと一緒に英語活動を心から楽しむことが英語活動を円滑に進め、子どもの成長を支えることに繋がっていくことがわかった。

今後は、保育者養成課程における「英語コミュニケーション」の授業で、子どもの英語活動を保育者自身が行えるようになることを主眼とし、保育現場で実践した英語活動を保育者養成校の授業にフィードバックしていきたい。

引用文献

- 1 五十嵐淳子, “保育者養成校に求められる保育実践力の育成ー英語学習の視点からー”, 『愛国学園保育専門学校紀要』第2号, 2010, p.23
- 2 文部科学省, 『幼稚園教育要領』教育出版, 1998, p.97
- 3 文部科学省, 『小学校英語活動実践の手引き』, 開隆堂出版, 2007, p.3
- 4 中山千章・廣瀬久子, “幼児英語を指導するにあたっての諸課題について”, 『つくば国際短期大学紀要』, 第39号, 2012, p.27
- 5 中山兼芳, 『児童英語教育を学ぶ人のために』, 世界思想社, 2008, p.12
- 6 厚生労働省, 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館, 2011, p.96
- 7 小川隆夫, 『先生、英語やろうよ!』, 株式会社 mpi, 2011, p.89 頁
- 8 前掲書 6, p.89
- 9 前掲書 6, p.80
- 10 前掲書 3, p.3
- 11 秀真一郎・木本有香他, “幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性”, 『吉備国際大学研究紀要』第23号, 2013, p.27
- 12 前掲書 11, p.26
- 13 前掲書 6, p.18

参考文献

- 大石晴美, 『脳科学からの第二言語習得論 英語学習と教授法開発』, 昭和堂, 2006
- 落合俊文, “早期英語教育に関する一考察ー幼児期における第二言語(外国語)習得についてー” 『洗足論業』第41号, 2012
- 門井幸子, 『これ英語でなんていうの?』, 講談社, 2003
- 門井幸子, 『英語で話そう楽しい一日』, 講談社, 2002
- 木村貴子, “保育英語の効用~青森中央短期大学幼児保育学科の学生に対するアンケートから~” 『青森中央短期大学研究紀要』第24号, 2011
- 佐藤朝代, 『「自然の教室」カリキュラム 年中編』, ひとなる書房, 2013
- 清水益治・森敏昭, 『0~12歳児の発達と学び 保幼小の連携と接続に向けて』, 北大路書房, 2013
- 秀真一郎・木本有香他, “幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性” 『吉備国際大学研究紀要』第23号, 2013

- トミー植松,『レッツ・トライ・イングリッシュ!英語で遊ぼう ゲームとコント』,評論社,2011
- 中本幹子,『実践家からの児童英語教育法 解説編』,アプリコット,2003
- 中村敦孔,『赤ちゃんからの英語レッスン 絵本で育てるバイリンガル』,リヨン社,2003
- 中森誉之,『外国語はどこに記憶されるのか 学びのための言語学応用論』,開拓社,2013
- 中山千章・廣瀬久子,“幼児英語を指導するにあたっての諸課題について”,『つくば国際短期大学紀要』第39号,2012
- 中山千章・廣瀬久子,“幼児教育としての英語をめぐる環境とその指導のあり方について— 付属幼稚園の英語カリキュラムをとおして—”,『つくば国際短期大学紀要』第38号,2010
- 中山兼芳 [編],『児童英語教育を学ぶ人のために』,世界思想社,2010
- 西尾由里,『児童の英語音声知覚メカニズム L2 学習過程において』,ひつじ書房,2011
- 原明子・伊藤英,“就学後の継続・発展につながる就学前英語教育の進め方— Graded Reading の導入と効果—”,『岐阜大学カリキュラム開発研究』第28号,2010
- マスミオーマンディ,『英語は世界のパスポート』,どりむ社,2007
- 文部科学省,『小学校英語活動実践の手引き』,開隆堂出版,2007
- 松崎博,『ゲームでおぼえる初めての英語 会話ゲーム』,ポプラ社,2002
- 和田陽子,“幼児期からの英語教育に関する研究”,『保育研究』第37号,2009
- ARCLE 編集委員会,『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』,リーベル出版,2005